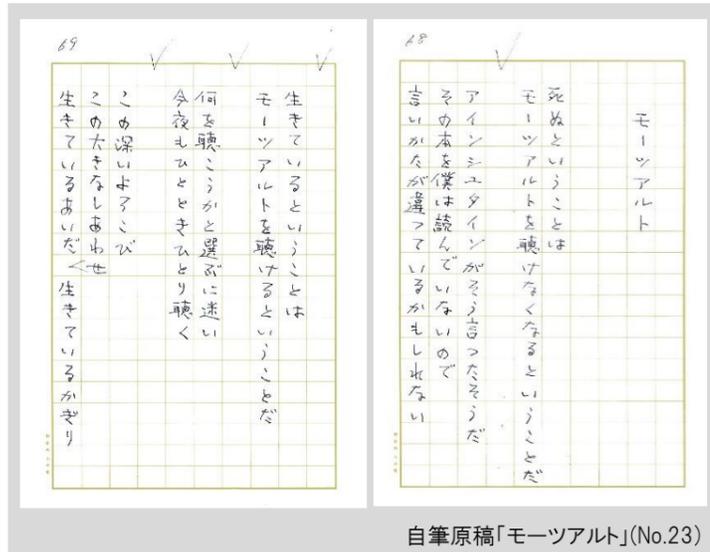




# 陸橋をこえて

## —大木実と大宮—

2022年9月7日(水)～11月4日(金)



自筆原稿「モーツァルト」(No.23)

「それでは何が好きかと聴かれれば、  
やはり読書と音楽を  
—音楽を聴くことの喜びを挙げる」  
(エッセイ「音楽と私」より)

音楽が好きだった<sup>みる</sup>実は、特にクラシック音楽を好み、作品にも度々曲名や作曲家の名前が登場するなど、重要な題材のひとつにもなっていました。

実が小学生だった時、趣味でクラリネットを吹くほど音楽好きの先生がおり、自宅に招いた生徒たちに、手回しの箱型蓄音機で「森の水車」などのクラシック音楽を聞かせました。

その影響で、音楽を好んで聴くようになった<sup>みる</sup>実は、好きな作曲家としてモーツァルトをはじめ、シューベルトやシューマンなどの名前をあげています。

なかでも「モーツァルト」と題した詩の中では、  
「アインシュタインの「死ぬということはモーツァルトを聴けなくなるということだ」という言葉を引用しながら、今こうして自分たちが彼の音楽を聴けることを

「この深いよろこび この大きなしあわせ」といい  
「生きているあいだ 生きているかぎり」と続けています。



「大木実所要のカセットテープ」(No.24) ご遺族所蔵

### 参考文献

- 『大宮文学散歩 大宮雑記帳8』秋山喜久夫/著 丸岡書店 1976年
- 『大木実詩集』大木実/著 思潮社 1989年
- 『家なき子(世界の名作全集19)』エクトール・マロ/原作 末松氷海子/訳 国土社 1990年
- 『おおみや』大宮市教育委員会指導課/著 中央社 1992年
- 『年暮れる』大木実/著 潮流社 1996年
- 『よしの芽 大木実先生を偲んで』詩の会 よしの芽 1997年
- 『埼玉現代文学事典』増補改訂版 埼玉県高等学校国語科教育研究会 1999年
- 『詩歌人名事典』新訂第2版 日外アソシエーツ 2002年
- 『荒川流域の文学 埼玉をめぐると作品』埼玉芸芸家集団/編 さきたま出版会 2006年
- 「市報おおみや」昭和39年10月号、昭和41年4月号、昭和41年11月号 大宮市秘書室広報課/編 大宮市
- 「ふれあいタウン誌 おおみや」昭和41年4月号、昭和47年10月号、昭和51年2月号 大宮名店会「おおみや」編集部/編

2022年9月7日  
さいたま市立大宮図書館  
さいたま市大宮区吉敷町1-124-1  
電話 048-643-3701 FAX 048-648-8460

No	種別	内容	所蔵
1	自筆原稿	「陸橋」大木実 筆	
2	書籍	室生犀星詩集『愛の詩集』復刻版 室生犀星 著 1999年刊行・初版 日本図書センター	
3	自筆原稿	「母たち」大木実 筆	
4	書籍	『場末の子』大木実 著 1939年刊行・初版 砂子屋書房	
5	自筆原稿	「屋根」大木実 筆	
6	書籍	『屋根』大木実 著 1941年刊行・初版 砂子屋書房	
7	自筆原稿	「初雪」大木実 筆	
8	書籍	『初雪』大木実 著 1946年刊行・初版 桜井書店	
9	自筆原稿	「月夜の町」大木実 筆	
10	書籍	『月夜の町』大木実 著 1966年刊行・初版 黄土社	
11	はがき	大西民子宛 大木実 1957年1月20日消印	
12	はがき	大木実宛 大西民子 1973年8月12日消印	ご遺族所蔵
13	書籍	『冬の支度』大木実 著 1971年刊行・初版 思潮社	
14	自筆色紙	「辛いこと厭なこと」大木実 筆	
15	自筆原稿	「妻」大木実 筆	
16	書籍	『大宮詩集』1号 1978年刊行 大宮詩人会	
17	自筆原稿	「通過」大木実 筆	
18	自筆色紙	「タベのからす」大木実 筆	
19	詩集(和綴じ)	「タベのからす」大木実 筆 作成年不詳	
20	書籍	『柴の折戸』大木実 著 1991年刊行・初版 思潮社	
21	自筆原稿	「自伝」大木実 筆	
22	筆記用具	大木実所要の筆記用具	ご遺族所蔵
23	自筆原稿	「モーツァルト」大木実 筆	
24	カセットテープほか	大木実所要のカセットテープ、カセットテープレコーダー	ご遺族所蔵
25	書籍	『大木実全詩集』大木実 著 1984年・初版 潮流社	宮川チエ子氏
26	書籍	『駅の夕日』大木実 著 1994年・初版 思潮社	秋田芳子氏

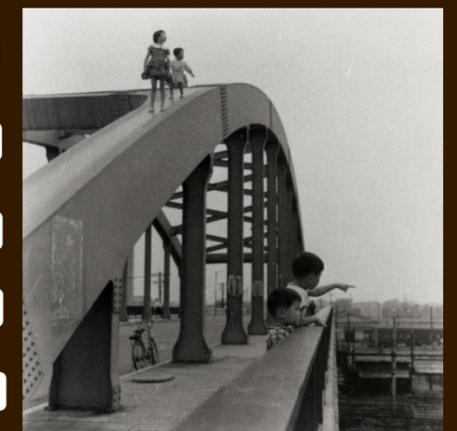
所蔵欄に記載がないものは、大宮図書館所蔵です



▲写真「旧市庁舎」1964年撮影 さいたま市提供  
大宮大門町にあった木造の市役所

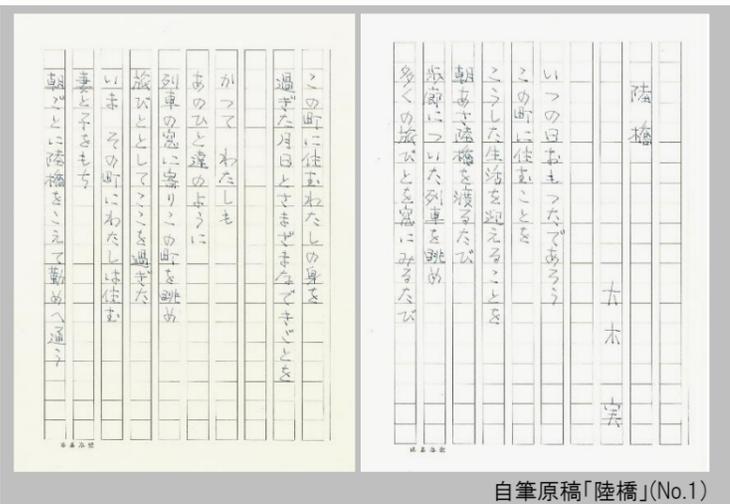


▲写真「踏切り」撮影年不明 さいたま市提供  
交通量が増え、「開かずの踏切」に



▲写真「大栄橋の子どもたち」  
撮影年不明 故関根鐵保氏所蔵  
大栄橋は1959年に完成、2年後に全面開通

## 1 陸橋 「朝ごとに陸橋をこえて勤めへ通う」



自筆原稿「陸橋」(No.1)

「いつの日おもったであろう この町に住むことを」に始まり、「朝ごとに陸橋をこえて勤めへ通う」と結ぶこの詩は、旧大宮市上小町に住んだ詩人・大木実が、大宮の町への想いを書いた「陸橋」(『天の川』1957年刊所収)です。大宮の陸橋でまず思い出されるのは大栄橋ですが、この詩は、実が見た完成前の光景を書いています。

大栄橋という陸橋は、電車が過ぎるのを長い間待たなくてはならない「開かずの踏切」を解消するために造られました。踏切の隣には小さな陸橋「川越新道跨線橋」があり、実は職場の大宮市役所まで通うのにこの橋を使っていたと思われるほか、汽車を見に子どもたちと一緒に訪れていたといわれています。東京の下町で育った実<sup>みのる</sup>は、旅路で通りすぎるだけだった大宮に偶然住むことになり、陸橋から汽車を眺めることを、「まったく縁というより云いようのない気持ちである」と、タウン誌「おおみや」に書いています。

▼写真「川越新道跨線橋と建設中の大栄橋」撮影年不明 吉村清氏所蔵  
写真中央に建設中の大栄橋、その手前に川越新道跨線橋が見える



## 2 青春 「ひとりの先生と一冊の詩集」

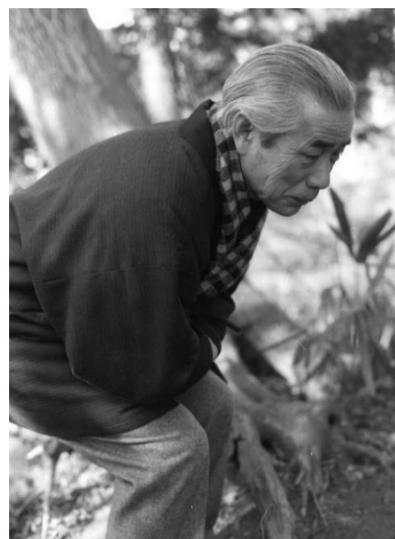
大木実<sup>おおきみのる</sup>は、1913年、東京の本所太平町(現・墨田区太平)に電気工夫だった父・文蔵と母・ハルの長男として生まれました。

小学校3年生の時、実の通う学校に教師の辻野勤治<sup>つじのかんじ</sup>が赴任してきます。辻野は子供たちに読書の喜びを教え、幼い実にも大きな影響を与えました。その後、電機学校へ進学した実<sup>みのる</sup>は、室生犀星の『愛の詩集』と出会います。この詩集は実に感銘を与え、詩を作って見たいという思いを後押ししました。後年、実が書いたエッセイのタイトルが「ひとりの先生と一冊の詩集」です。

学校を退学した実<sup>みのる</sup>は、様々な職を経て、尾崎一雄<sup>おざきかずお</sup>の紹介により砂子屋書房<sup>すなごやしよぼう</sup>で働くことになり、1939年に同書店から第1詩集『場末の子』を刊行しました。続いて第2詩集『屋根』を刊行しますが、召集(赤紙)を受け戦争にいくこととなります。出征中も丸山薫<sup>まるやまかおる</sup>の推挙で『四季』の同人に参加するなど、詩への情熱を持ち続けた実<sup>みのる</sup>は、戦中・戦後の混乱の中『故郷』・『遠雷』・『初雪』・『夢の跡』・『路地の井戸』といった詩集を続々と刊行しました。



第1詩集『場末の子』初版(1939年砂子屋書房刊)(No.4)  
初版は限定250部が刊行された



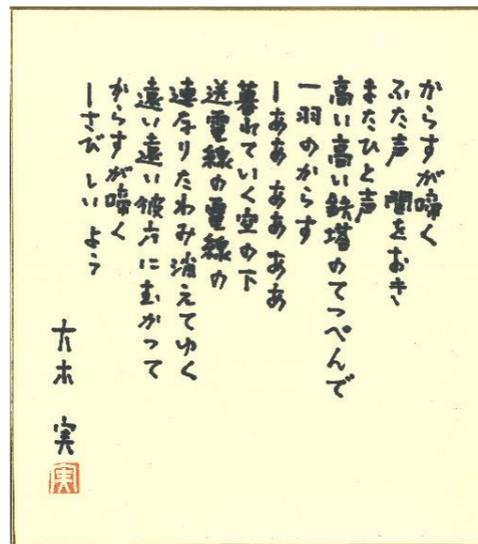
写真「晩年の頃の大木実」 ご遺族所蔵

## 3 大宮 「つまりは縁があったのだ」

帰国後、本庄の親戚宅に半年ほど身を寄せた実<sup>みのる</sup>は、大宮在住の詩人・山崎馨<sup>やまざきかおる</sup>の紹介で上小町に転居し、大宮市役所に職を得てから27年間を公務員として過ごしました。実は、エッセイ「大宮30年」の中で大宮に住むことになったことを「つまりは縁があったのだ」と書いています。実は、大宮の地域文芸活動にも貢献し、市民からの作品を集めた「大宮文芸」の選考を担当したほか、大宮ゆかりの詩人・宮澤章二<sup>みやざわしょうじ</sup>らとともに「大宮詩人会」の創設にも携わりました。

『路地の井戸』を刊行した後、病がちになっていた実<sup>みのる</sup>でしたが、『月夜の町』を刊行したことや「四季」が復刊されて詩人たちと交流が再開したことをきっかけに、気持ちを新たに、詩集『夜半の声』や『冬の支度』を刊行します。退職後、実<sup>みのる</sup>は大宮を離れ家族とともに鴻巣市へ転居しました。

晩年も『七十の夏』、『駅の夕日』と詩集の刊行を続けていた実<sup>みのる</sup>でしたが、1996年に82歳で亡くなります。最後の詩集は、亡くなった後に刊行された『年暮れる』になりました。



自筆色紙「タベのからす」(No.18)